

二見忠隆奧書戰國期
灘子伝書

【凡例】

- 一、本項には、能楽研究所蔵の『二見忠隆奥書戦国囃子伝書』能研1332を翻刻した。
- 一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、印刷上の制約、通読の便宜を考慮し、左の方針に従った。
 - 1、漢字と仮名の別、仮名遣い、送り仮名は底本の通りとした。改行は原本に従い、丁の区切りを『で示し、括弧内に丁数と表裏の別を記した。ただし、一部改行を改めたところもある。
 - 2、適宜句読点を付した。ただし、32丁ウから38丁オの「哥うら」「弓矢のたちあひ」「舟立合」「正尊起請文」の詞章を記載する部分の句読点は原本のままとし、新たに句読点を加えることはしなかった。
 - 3、漢字異体字や旧字体は、通行の字体や新字体に改めることを原則とした。但し、「哥」「云」「躰」などの若干の異体字は底本のままとした。
 - 4、変体仮名は普通の平仮名に改めたが、底本は片仮名をも多用するため、平仮名と片仮名との別は底本のままとした。但し、「り」と「リ」、「つ」と「ツ」等の区別については、校訂者が適宜判断して定めた。
 - 5、底本の文字に誤りがある場合には、正字を括弧書きで傍記するか、(ママ)と傍記した。
 - 6、謡曲の引用部分を「」で囲んだ。ただし、冒頭に曲名を掲げて一つ書きで謡曲詞章のみを列記する場合や、五行以上にわたって謡曲詞章を引用する場合など、一目で謡曲詞章の引用であることが明らかな箇所では、原則として、特に「」で囲まず、他の条と同じ扱いにした。
 - 7、曲名を特に明記しない謡曲の引用部分については、引用箇所の最初の部分にカッコ書きで曲名を傍記した。ただし、同曲の引用箇所が続いて重出する場合には、これを省略した。
 - 8、底本における墨筆・朱筆の別は、特に明示しなかった。また、本文への注記・振仮名・振漢字等は、本文を書写しながらの補正と認められる墨筆訂正部分は、訂正後の形のみを本文として示すことを原則とした。その他の行間傍注の類は、括弧等で囲まずに、すべて底本のままに然るべき位置に小活字で示した。但し、印刷の都合上、左傍書を右傍に移すなどの注記の位置の変更を行った場合も若干ある。
 - 9、鼓の粒付の符号はなるべく底本のままに然るべき位置に配置した。ゴマ節等は、活字化できるものみの翻刻を原則とした。
 - 10、その他、底本の記述を翻刻に活かすきれなかった部分については、能楽研究所のデジタルアーカイブ「能楽資料総合デジタルアーカイブ」及び「能楽貴重資料デジタルコレクション」にアップしている本資料の画像データを合わせて参照されたい。
 - 11、本資料の翻刻・校訂は高桑いづみ・深澤希望・山中玲子・中司由起子・宮本圭造が、解題は宮本が担当した。

【翻刻】

たかさこ

田むら

百まん

二人しつか

三井寺

かきつはた

ありとをし

源氏供養

松風村雨

軒端の梅

采女

柏さき

さくら川

通小町

はせを

夕かほ

西行桜

清つね

玉かつら

山うは

あたか

船弁慶

難波

誓願寺

隅田川

かんたん

とうる

あひそめ川

きぬた

女郎花

うこん

野々宮

江くち

○小鼓之手聞書

高砂

いくかきぬらんあとすゑも、いさし雲のはるくと

さしも思ひしはりまかた、たかさこのうらに着に

けり、たかさこのうらにつきにけり

一秋のむしのほくろになくもみな、和哥のすかたな

らすや

一かけとも落葉のつきせぬハ、まことなり松の葉

の、ちりうせすして

一夕浪のミきわなる、あまのをふねにうちり

て、をひかせにまかせつ、おきのかたにいてにけり

〔12オ〕

〔11ウ〕

〔11オ〕

や、おきのかたにいてにけり

一さてはんせいのをミころも、さすかひなにハ

一おさむる手にはしゆふくをいたき、せんしうらくは

一まんさいらくにハいのちをのふ、あひおひの松風さつ

く、のこゑそたのしむ、さつく、のこゑそたのしむ

田むら

一かけものとかにめくる日の

一たきのひ、きも静なる

一しゆんせう一こく〔此内うたす〕

一あらく、おもしろの

一さそふはなとつれて

一をとのはたきのしらいとを

くりかへしかへしても

一てんもはなにゑ、りや

一月のむら戸を、しあけて、うちにいらせ給ひけり

一ふてんの下そつとのうち 一せたのなかはしふミならし

一こまもあしなミや 一せたのなかはしふミならし、こまも

一つちも木もわかおほ 一まつとハしらてさをしかの

す、かのミそきせし代々までも

一あめあられとふりか、つて、きしんのうへにみたれおつれハ

一しゆつそせうとくやくねひ、くわんおんのちからを

一あはせて、すなはちけんちやくおほんにん

一かたきハほろひにけり、是くわんおんのふつりきなり

百まん

一ちく馬にいさや法のみち、ちくまにいさやのりのミち

まことの友をたつねん 一みたたのむ

一雲はれねともにしへ行、あミた

〔13オ〕

〔12ウ〕

一 たれかはたのまさらん、たれかたのまさるへき
 一つむともつきし、おもく共ひげや
 一 なをさんかいのくひかせかや、うしのくるまのどこと
 はに、いつくをさしてひかるらん、ゑいさら
 一 むしろきれすかこもの、みたれこゝろながら
 一 ならさかや 一 おきわかれて、いつちともしらす(4)
 一 かけうつす面影、あさましき
 一 まことにうき世のさかなれや、さかりすきゆく
 一 かさしそおほきはなころも、きせんくんしゆする、この
 一 道あきらめんあるしとて、ひしゆかつまかつくりし
 一 ミちあきらめむあるしとて、ひしゆかつまかつくりし
 一 てんちくしたん我てう 一 かんたんしてせい
 のりける、おやこあふふの袖なれや、百まんかまひ
 を見給へ 一 きやう人なからも子にもやあふと(4)
 一 さくらきのミヤ、かミのみやたきにしつこうのたき
 一 たのむこかけのはなの雪、あめもたまらぬおくやま
 の、をとさはしき春の夜の、月ハおほるにて、なを
 足曳のやまふかミ、わけまよひ行ありさまハ
 一 春の夜もしつかならて、さはしきみよし、
 一 おひてのこゑやらんと、あとをのミみよし野、おくふ
 かくいそく山路かな 一 一身こそハしつ

一(5)オ

一 め、名をハしつめぬ、もの、ふの、ものことにうきよの、なら
 ひなれハと、おもひかへせハ山さくら、雪にふりなす
 はなのまつかせしつか、あとをとひ給へ、しつか、
 あとをとひたまへ
 一 夕をいそく人こころ、しるもしらぬも
 一 雲をいとふやかねてより 一 さ、なミヤ、しかからさき
 一 さくらさくはるならハ一ましてやつたなきやうちよなれは(5)
 一 ほんなふのゆめをさますや、のりのこゑもしつかに
 一 月もかすそひて、百八 一 我もこしやうのくもはれて
 一 けにおしめとも、など 一 うらミをそふるゆくゑにも
 一 こひちのたよりの、をとつれのこゑときく物を
 一 恋路のたよりの、をとつれの声ときくものを
 一 はんやのかねのひ、きは、かく
 一 なミたこころのさひしさに、このかねのつくくと
 一 かねゆへにあふ夜なり、うれしきかねのこゑかな
 かくてともなひたちかへり、かくてともなひたち
 帰り 一 かきつはた
 一 はるきぬるから衣、きつ、やまひをかなつらん
 一 人まつおんな、ものやミ 一 いせやおはりの、うミ
 一 ちきりし人くのかすくくに
 一 我身ひとつハ、もとの身にして、ほんかくしんによ
 の身をわけ、いんやうのかミ

一(6)オ

〔6ウ〕
蟻通

一もとのことぐにあゆミゆく、ゑツてうなんしにす
 をかけ、こはほくふうにいはいはへたり、うたに
 一つらゆきも是をよろこひの、名残のかくら
 一夜はあけて、たひたつそらにたちかへる、たひ
 たつ空にたちかへる

一白楽天なのりの時、小鼓の覚悟、かくのことくたるへし。

源氏供養

源氏供養

〔7ウ〕

一紅葉の賀のあきの、らくようもよしやた、
 一あかしのうらにミをつくし、一まきはしらのもとにゆかむ
 一ふちのうら葉にをくつゆの、そのたまかつら
 一是もかけるふの身なるへし、ゆめのうきはしを
 一たすけたまへともろともに、かねうちならして、ゑ

かうも

一いなつまのかけ

一ちかひかな、おもへハゆめのうきはしも、ゆめのあひ
 たのことはなり、夢のあひたのことはなり

〔8ウ〕
松かせむら雨

一此一せいの打出しハ、こつ、ミよりうち申候。おつ三、後

三ツめのおつに声をかくへし。

一浪こ、もとやすまのうら、月さへぬらすたもとかな

一うら山しくもすむ月の、てしほを

一あまのすてくさいたつらに、くちまさりゆく

一よせてハかへるかたをなミ、あし迎のたつこそハ

〔6ウ〕

一かたをなミ、あしへのたつこそは

一四方のあらしもをとそへて、一やくしほけふりこ、ろせよ

一月こそさはれあしのや、なたのしほくむ

一月ハひとつかけハふたつ、みつしほの

一月ハひとつかけハふたつ、みつしほの

一月はひとつかけハふたつ、みつしほの

一よるのくるまに月をのせて、うしともおもはぬ

しほかな

一すまのあまりにツミふかし、わかあととひてたひ給へ

一是を見るたひに、いやましのおもひくき、葉すゑにむすふ

一よみしもことハリや、なをおもひこそハふかけれ

一すて、もをかれず、とれハおもかけに

一跡より恋のせめくれハ

一せんかたなミたに、ふし

しつむ事そかなしき

一せんかたなミたに、ふししつむ事そかなしき

一かへるなミのをとの、一すまの浦半の松のゆきひら

一あらたのし御うたや、たちわかれ

一松にふきくる、風もきやうして

一いとま申で、かへるなミのをとの、すまのうら

一かけて、ふくやうしろの山おろし

一いとま申で、かへるなミのをとの、須磨のうらか

一いて、吹やうしろの山おろし

一いて、吹やうしろの山おろし

一いて、吹やうしろの山おろし

一いて、吹やうしろの山おろし

一いて、吹やうしろの山おろし

一いて、吹やうしろの山おろし

〔9ウ〕

〔8ウ〕

一むらさめとき、しをけさ見れハ、松風はか
りやのこるらん

軒端梅

一鳥はしゆくすち、うの木、僧ハた、く月下の門

一鳥は宿すち、うの木、そふハ 一秋きにけりとおとろかす

一けけしゆしやうの、さうをえたり、とうほくゑんやう
の、しせつもけにとしられたり

一いさきよきひ、きハ、しやうらくのゑんをなすとかや

采女

一 大君のこ、ろとけさりしに 一露のなさけに心とけ

一 かせもおさまりくもしつかに、あんせんをなすとかや

一 風もおさまり雲しつかに、あんせんをなすとかや

一 とふさにおよふくものそて

一 けふもくれはとり、声のあやをなすふかのきよく、

ひやうしをそろへ、たもとをひるかへして、いふかく
くわんせんたる、うねめのきぬそたへなる

一 御かわらけたひくめくり 一御かわらけたひく

めくり、あり明の月ふけて、山ほと、きす、さそひ

一 山ほと、きす 一 糸いりよをうけていふかくの

一 ちりうせすして、まさ木のかつら、なかくつたわり

柏さき

一 まなこにさえきり、おもひのけふり

一 くとく池の、はまのまさこをかすくの

一 くとくちの、はまのまさこをかすくの
一 よきひかりそとあをくなりや、南無きミやうみ
たそん、ねかひをかなへ給へや

一 よくく見れハそのはらや、ふせ屋におふるは、

木々の、ありとハ見えてあはぬとそ

一 さくら川

一 あらしもつかむ花のゆき、さくら川にも付に

一 けり 一 川かせに、ちればそ

一 我もゆめなるを、花のミと 一 花なれハ、おちて

一 も水のあはれとハ、 一 さくらをあはれミ、つゆをかなし

一 あたになざしと 水をせき、雪をた、へて

一 かせもよきて、ふき 一 はなによるへの、水せきとめて

一 みよし野、みよしの、く 一 あふときもなくね

一 こぞ、うれしきなミた成けれ 一 かくてともなひた

一 ちかへり 一 かくてともなひたちかへり

通小町

一 あはれむかしの恋しきハ、花たちはなの一枝

一 あはれむかしの恋しきハ、花たちはなの一えた

一 跡とひ給へ御そうとて、かきけすやうに

一 さくをのへ香をたき 一 つ、めと我もほに出て

一 ともになミたの、露ふか草のせうしやう

一 ひとかたならぬ思ひかな 一 夕くれハなにと

一 花すりころもの色かさね 一 すハはやけふも

一 糸もんけたかくひきつくろひ、おんしゆハいかに、
月のさかつき 一 糸もんけたかくひきつくろひ

〱はせを

一 庭のをきはらまつそよき、そよかゝる

一 庭の荻はらまつそよき、そよかゝる

一 花ハあらしのをとにのミ (12ウ)

一 もろくもおつる露の身ハ、をきところなきむし

の音の 一 おもひいるさの山ハあれと、た、

月ひとりともなひ、なれぬるあきの

一 た、月ひとり友なひ 一 小さ、はら、しのに物おもひ

一 うきふししけきをさ、原、しのに物おもひ

〱夕顔

一 あるしもしらぬ所まで 一 しんによの月もはれよそと (13オ)

一 たかひに秋のちきりとは、なささりし

一 この世ハかく斗、はかなかり

一 此世ハかくはかり、はかなかり

一 かへらぬ、水のあはとのミ、ちりはてし

一 かへらぬ、水のあわたのミ、ちりはてし

一 あげくれのそらかけて、雲のまきれにうせにけり [13ウ]

一 右此うち上ハ、一せいのうちとめのことし。是秘事

なれハ常にハウたす。

〱西行桜

一 此世のほかハなき物を 一 柳さくらをこきませ (13ウ)

一 一本の花さかり 一 一かれにしつるの

一 かねをもまたぬ、わかれこそあれ、わかれこそあれ

一 ゆめハさめにけり、あらしもゆきもちりしくや

〱清つね

一 しほる、袖の身のはてを

一 なにかしのハんほど、きす 一 たまくらをならへて (14オ)

一 あきのくれかなとてハ 一 あしよは車のすこくと

一 くわんかうなしたてまつる 一 くわんかうなしたてまつる

一 又ふねにとりのりて 一 よそめにハひたふる、きやう

らん 一 た、一声をさいこにて、船

よりかつはとおちしほの

一 むみやうをもほつしやうもミたる、かたきうつハ

なミ、ひくハうしほ

〱玉かつら

一 山もとゆけハ程もなく、はつせ川

一 つらなるのきをたえくの、きりまに残る

一 紅葉の色にときは木の、ふたもとのすきに

一 あらきなみかしたちへたて

一 たよりとなれハはやふねに、のりおくれしと

一 たよりとなれハはや船に、のりおくれしと

一 たよりとなれハはやふねに、のりおくれしと

一 たよりとなれハはやふねに、のりおくれしと

一 なをやうきめを水とりの、くかにまとへる (15ウ)

一をのへのかねのよそにのミ、をもひ
一おもへハ法のころもの、たまならハ
一たまの名となのりも
一はけしくおちてつゆ

も涙も、ちりく
一むくゐのつミやかす
一むくひのつミやかすくの、う

きなにたしも
一岩もる水のおもひにむせ
一こ、ろハしんによの
一五ウ

ひ、あるひハこかる、や
一こ、ろハしんによの
一五ウ

山うは

いと、ミヤコハとをさがる
一いふかとみれハそのま、
一をまねくおはな

一その夜をおもひしら玉か
一をまねくおはな

一はつほくとうくとして、山さらにかすかなり
一をまねくおはな

一月卿しゆしやうをへうして、こんりんさいに
一をまねくおはな

一夕はたたつるまどにあて、ゑたのうくいす
一をまねくおはな

一しつの目に見えぬ、おにとや
一をまねくおはな

一16オ

あたか

一きさらきの十日の夜
一をまねくおはな

一かすミそ春はうらめしき、
一をまねくおはな

一しの、めはやくあけ行ハ、あさちいろつく
一をまねくおはな

一あらち山
一をまねくおはな

一に見えたるハ
一あしのしのはら波よせて、なひく

一あらしのはけしきハ、花のあたかに付にけり
一をまねくおはな

一つとめをはしめ、しんしやうにきられ申さんといひて
一さんやかいかに、おきふし
一よろゐの袖まくら
一ふうはに身をまかせ
一そのちうきんもい
一そのちうきんもい

一たちくるをとや須磨あかし
一そのちうきんもい
一そのちうきんもい

一たつらに、なりはつるうき身の、そも何といへる
一そのちうきんもい
一そのちうきんもい

一ぬんくわそや
一おもひかへせハあつさ弓の、
一たまふへきなるに、た、代にハ、

一すくなる人ハ
一あやしめらるなめんくと
一17ウ

一神やほとけもましまさぬかや
一あやしめらるなめんくと
一17ウ

一心なくれそくれはとり
一あやしめらるなめんくと
一17ウ

一てまつさへきるさか月の
一あやしめらるなめんくと
一17ウ

一いわおにひ、くをと、なるハ滝の水
一あやしめらるなめんくと
一17ウ

一岩尾にひ、くをと、なるハ滝の水
一あやしめらるなめんくと
一17ウ

一いとま申で、さらハとて、おひをおつとり、
一あやしめらるなめんくと
一17ウ

一かたにうちかけ、とくしやの
一あやしめらるなめんくと
一17ウ

船弁慶

一たかき御かけをふしおかミ
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一たいもつのうらに付にけり
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一まさりておしきいのかな、きみにふた、ひ
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一たちまふへくもあらぬ身の、そてうちふるも
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一二たひ代をとり、くわいけいの
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一こうなりなとけて身しりそくは
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一せうせんにさほさして、ここのゑんとう
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一つぬにハなひくあをやきの、枝をつらぬる
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一ふな子とも、はやともつなをとくくと
一うしほも浪もともにひく
一17ウ

一17ウ

一16ウ

一 なミたにむせふ御わかれ、見るめもあはれなりけり。 〔18オ〕

一 けにものどけきかさなきの、はまのまさこの
ふきあけの、浦つたひして行ほとに

一 是もみやこか津の国の、なにはのうらに付に
けり 一 今ハ春辺ににほひきて

一 よのためしこそ、けに道ひろき
一 たみのかまとハ、にきわぬにけりと

一 はまのまさこのかすつもりて、雪ハほうねん 〔18ウ〕
のミつき物 一 せんしうはんせい
たてまつる 一 かけよりも、しげきみかけハおう
きミの、国なれハ土も木も、さかへさかふる津の国の

一 花ひらくれハ天下みな、春なれや
一 夜もすから、なくさめ申へしや、したふしして

一 なにはのことかのりならぬ 一 かねもひ、き
一 入江のまつかせ、むらあしの葉をと

一 難波津に、さくやこの花 〔19オ〕
一 なみたてうつハさいしやうらく

一 入日をまねきかへすてに、いり日をまねき 〔19カ〕
返すてに 一 なミなれば、よりてハうちか

一 へりてハうち、此をんかくにひかれて

一 天下をまもりおさむる、 〔19キ〕
き、 はんせいらくそめてた

一 時もこそあれ春のころ、花のミヤこに 〔19オ〕

一 うけよろこぶや上人の
一 ししやうしんしむしんゑかう

一 十声一こゑ数わかつて 〔19カ〕
一 にしにかけろふ夕月の、よるのねふつをいそかん、

一 夜ねふつ 一 八まんしよしやうけうかいせ
一 御せいくわんしそと、仏と上人を、一たいにおかみ申

一 せきたうのいしの火の、ひかりともにもうせにけり 〔20オ〕
一 かねうちならしとうおんに 一 いまさいはうのミタ如来

一 せいかはるかにきこゆ 〔20カ〕
一 三世りやくとう一たい

一 さ、てもわたる彼きしに、いたりくくて 〔20キ〕
一 まよひの雲もそらはれ、しんによの月

一 こ、をさる事とをからす 一 をのく帰る 〔21ウ〕
一 そてを返すや、返々も 〔21オ〕

一 是そなにおふすミ田川、渡にはやく 〔21カ〕
一 おやと子の、してう 一 とへともく、こたへぬ

一 ハうたて 一 船こそりてせはくとも

一 のこりても、かひあるへきハむなしくて、あるハ 〔22オ〕
かひなきは、木、の 一 いよいよおもひハ

一 一ふてうのくもお、へり 〔22カ〕
一 一の、めの空もほのくと、あけ

くさはうくとして、たしるしはかりは
あさちかハらと、なるこそあはれなりけり

かんたん

一名にのミき、しかんたんの
かりねのゆめを見るやと、かんたんの

夢とハしら雲の、うへ人となるそふしきなる

たのしみもかくやと

せんくわはんくわの御たからの、かすをつらね

ちにひく、
きくのさかつきとりく

たのシミの
もみちもいろこく、なつ

おりふしハ
五十年の

松かせのをと、なり
一すいのゆめ

とをる
千里もおなし一あしに、ちさともおなし

かさなりて
一そてさむき

一むかしのあとをミちのくの
老の浪も帰るやらん、あら

音をのミ
一かひもなきさの浦千鳥

一ふかくさ山よ、こはたやふしミのたけた、よと

一南無さんほうく

一しゆんしうをと、めり
一さか月のかけの

一月またさやけ
一雪もふりつ、四き

かくてときすきころされは、
一たちまち

一つらく

一南無さんほうく

一身ハすてに
一松かせもたつなりや、きり

一おひのなミもかへるやらん
一かひもなきさの浦千鳥

一かひもなきさの浦千鳥

鳥羽も見えたり
一しほくもりにかきまきれて、あとも見えす

一それハさんしうに
一かけをふねにもたとへたり

一月もはや、かけかたふきて

あひそめ川

一かしろはかたをうち遇て、さいふにはやく付
にけり

一は、におひつき申さんと
一夕かほのそらめして、あひそめ

一おもかけの、是こそちよ、よむさんや

一とりつきかみかきなて

一はうたいあらたにねむりて、まなふたをひらく

一かんしよくつみにきえうせて、かうけんにくちはて、

一いきてうらみし、てよろこぶ、ありかたの

一そもくたうしやと申ハ、ほつしやうのミヤ

こを出て、ふんたんとうこのさかひに

一ミやうくとあるくかひにしつミ、ほたひ

一た、これたうしやのしんおんそと、よろこ

ひのつとをたてまつり、よろこひののとを

たてまつれハ、神ハあからせ給ひけり

きぬた

一明し暮して程もなく
一くさもかれく

一おもひてハ身にのこり、むかしハかはり跡もなし

一人のここの葉うれしからん

一ころもに落る松のこゑ、夜さむをかせやしらすらん

22ウ

23ウ

23ウ

24ウ

24ウ

25ウ

一 ふきをくれと、まとをの衣うたふよ
 一 いまのきぬたの声添て
 一 夢をやふるな、やふれてのちハ
 一 月にハとてもねられぬに、いさく
 一 二の袖やしほるらん
 一 ミつかけくさならハ、なみうちよせようたかた
 一 きぬたのをと夜あらし
 一 ましりておつる露なミた、ほろくはらく
 一 ハらと、いつれきぬたのをとやらん
 一 ましりておつる露なミた、ほろくはらく
 一 はらと、いつれきぬたの音やらん
 一 やまふのゆかにふししつミ
 一 むねのけふりの、ほのおにむせへハ、さけへとこ
 一 ぬか、いてハこそ
 一 めくりめくれとも、いきしにの
 一 うらみハくすのはの、かへりかねて
 一 かけたのミハあたたなミの、あらよしなやそら
 一 事や、そもかゝる人の心や
 一 夜さむの衣うつとも、ゆめともせめてな
 一 と、思ひ知すやうらめしや、ほつけとくしゆの
 一 すかたにて、
 一 女郎花
 一 いつしかあとに遠さがる 一 夢はいそちのあわれよの

〔26マ〕

〔26ウ〕

一 ころハ八月なかはの日 一 紅葉もてりそひて、日もかけるふの〔26ウ〕
 一 しるしのはこをおさむなる 一 のりのしんくうし
 一 山そひへ谷めぐり 一 あけの玉かきミとしろの
 一 たよりをおもひよりかせの、ふけ行 一 こ、によつてつらゆきも
 一 くねると書しミつくきの、あとのよ
 一 よしなき水のあはときえ 一 よしなき水の淡ときえ
 一 つ、いて此川に身をなけて
 一 そのつかハ是ぬしハわれ、まほろし
 一 しやゐんのあつきハ、身をせめて、しやゐんのあつきハ
 一 つるきハ身をとをし、はんしやくハほねをくたく
 一 露のうてなや花のゑんに、うかめてたひ給へ、
 一 つミをうめてたひ給へ
 一 うこん
 一 きたの、森もちかつくや
 一 ひけいによりて花ころ、なれくそめて
 一 も、ちとり 一 しめのゆき、のもりは
 一 見すや 一 一はこの神の御たひもの
 一 待給へと、花にかくれうせにけり
 一 ミかけを、うつしうつろふ、さくらころもの
 一 長月の七日の日も、けふにめぐりききにけり
 一 あらさひしミやとところ、あらさひし此宮所
 一 あらさひしミやとところ、あらさひし此宮所
 一 野々宮
 一 〔27マ〕
 一 〔27ウ〕

一 なか月の七日の日も、けふにめくりきけり
 一 つらき物にハ、さすかに
 一 秋のはなミなおとろへて、虫のこゑも
 一 さひしきミちすから、秋のかなしみ
 一 さひしきみちすから、秋のかなしみ
 一 ゆくえもす、か川、やそせの波にぬれくす
 一 ためしなき物をおやとこの、たけの都路に
 おもむきし 一
 一 くら木のとりゐのふたはしらに、たちかくれて
 一 くら木のとり居のふた柱に、たちかくれて
 一 くら木の鳥井のふたはしらに、たちかくれ
 一 かけさひしくも、もりの下露
 一 たれ松むしの音ハ、りんくとして
 一 こ、ハもとより、かたしけなくも、神かせやいせの、
 うちとのとりゐに、出入すかたハ、しやうしの道
 を、神ハうけすやおもふらんと、また車にうち
 乗て、火宅のかとをや出ぬらん、くわたく
 一 などやおしむといふなミの、かへらぬ
 一 又ハ一河のなかれの水、くくミても
 一 とハんともせぬ人をまつも、身のうへとあはれ
 一 花もゆきも雲もなミも、あはれ代にあは、や
 一 さらに世々のおはりをわきまふる事なし

江口

〔28オ〕

〔28ウ〕

〔29オ〕

一 さきの世のむくひまで、おもひやるこそかなし
 一 紅花の春のあした、紅きんしうの山、よそをひ
 をなすと見えしも夕へのかせにさそはれ、
 紅葉の秋の夕
 一 色をふくむといへども、あ
 一 松風蘿月に、こと葉をか
 したの
 一 はすひんかくも、さつて来る事もなく、すい
 ちやうこうけいに、枕をならへしいもせも、いつ
 のまにかわ
 一 ある時色にそみ、とんちや
 くのおもひあさからす、又あるときハ
 一 又ある時は声をき、あんしうの
 一 けにやミな人ハ、ろくちんのきやうにまよひ、六
 こんのつミをつくる事も
 一 白雲にうちのりて、西の空に行給ふ、あ
 りかたくそおほゆる
 一 枕をならへしいもせも 一 まくらをならへしいもせも、
 三
 一つの間に
 一 まくらをならへしいもせも、いつのまにかハ
 一 枕をならへしいもせも、いつのまにかハ
 一 かくしもたつねきりしきミ、つミを
 一 したひの水をとも、こけにきこえてしつかなる、
 此山すミそさひしき
 一 たつね給へといひすて、かきけすことく
 にうせにけり

三輪

〔29ウ〕

〔30オ〕

〔30ウ〕

一 御かけあらたに見え給ふ、かたしけなの御事や
 一 ひるを何とうは玉の、よるならてかよひ給はぬハ、
 いとふしんお、き事也

〔31オ〕

一 契もこよひはかりなりと、ねんころに

一 おたまきにはりをつけ、もすそに是をとちつ
 けて、跡をひかへてしたひ行

一 をのかちからにさ、かにの 一 此山もとの神かきや

一 此山本の神かきや

一 こわそもあさましや、ちきりし人のすかたか、
 其いとのミわけ残りしより、三輪のしるしの

〔31ウ〕

〔32オ〕

ㄱ哥うら

きゆるものハ二度見えずさるものハかさねて

きたらす。しゆしゆにしやうめつし。せつなりにさ

んす。うらめしきかなや。しやか大しのおんこむの

きやうをわすれ。かなしきかなや。ゑんまほうわ

うのかせきのことばを聞。ミやう利身をたすく

れとも。いまたほくはうのけふりをまぬかれす。

をんあひ心なやませとも。たれかくわうせむの

せめにしたかはさる。これかためにちそうす。しよ

とく。いくはくのりそやこれによつてつくす。

しよさたざひなりしはらくめをふさひて。わう

〔32ウ〕

しをおもへハ。きうゆうみなはうす。ゆびをおつ
 てかうしんをかそふるに。しんそお、かくれぬ。
 時うつり事さつて。いまんそへうほふたらん
 や。人と、まり我行。たれか又常ならん

〔33オ〕

ㄱ三かひ無安ゆによ火たく。てんせむなをしし
 くの身也。いはんやけれどつしんせんのはう

においてをやなどか其つミかろからんしに

くるしミをうけかさねかふにかなしミ名をさう

るざんすいちこくのくるしミハきうちうにて

身をきる事せつだんして。ちろうせきたり。

一日のうちにはんしはんしうたりけんじゆち

こくのくるしみハ手につるきの木をよとれハ。

はくせきれいらくすあしにたうせんふむとき

ハ。けんじゆともにけすとかや。せきくわつちこく

のくるしミハ。れうかひの大石もろくの。さい人

をたく次のかわほん地獄ハ。かうやにくわゑん

をいた、けハ。はくせきのくと。なり。ゑんねん

たる火をいたす。ある時ハせうねつ。大せうねつ

のほのをにむせひ有時は。くれん大くれんの。こ

ほりにとちられ。てんちやうかうへをくたき

くわさうあなうらをやく。うへへてはてつくわん

をのミ。かつしてハ。とうしうをのむとかや。ちこ

〔34オ〕

〔33ウ〕

くくるしミハむりやうなりかきのかくるし
 ミハむへん也。ちくしうしゆらのかなしミも。
 われらにいかてまさるへき。身よりいたせる
 とかなれハ。心の鬼の身をせめてかやうに
 くを請るなり。月の夕部の浮雲ハのちの
 世のまよひなるへし。

弓矢のたちあひ

桑の弓よもきの矢のまつりこと。まことにめ
 てたかりけり。あら有難哉く

いさやさらハ我等も。けいやくかしやしゆつをつたへ
 ける。弓張月のやさしくも。雲の上まで。名を
 あくるゆミヤの家をまもらんくものふの。
 やま宇治川のなかれまで。みなもとときよし。弓

張の月。あはれめてたかりける。おさまれる御
 代の。時とかや。しゆくそんハ。たいひの弓
 に。ちえの矢をつまよつて。三とくのねふりを
 おとろかし。あいせん明王ハ弓矢をもつて。あん
 やうのすかたを。あらはせりされハ五大明王の
 文殊ハ。やうゆふとけんして。らいを取て弓を
 つくりあいせんをあらはして。矢となせり又わ
 かてうのしんくうくわうくうハせひとのけきしん
 をしりそけき。たミけうしゆんをさかへたり。かう
 しん天皇八幡大菩薩。みなもとときよき石清

〔35オ〕

〔35ウ〕

水なかれのすゑこそひさしけれ

一名所ハさまくおほけれと。かいへんことにすく
 れたり。のり物おほしと申せとも。船にすぎたること
 ハなし。こけやこけとよわたしもりくおし
 におせとよわたし船。りしやうほうへんの朝霞
 水火たうそくのおそれなくさいなんをさり
 つ、きうはけんそくゆたかにて。しんしつたのし
 かりけり。悦もいのちも。としくにますかみ。
 さいはひもさかへも。よひくにミつしほの。むね
 のかたとよりにてりしやうのかとに。いりなんや

〔36オ〕

上哥 一当座のせきをのかれむと。土佐ハきこふるふん

しやにて。自筆に是を書つけ弁慶にこそ
 わたしけれ。下うやまつて申きしやうもんの
 事。上ハ梵天帝釈四大天王ゑんま法王五
 道のミやうくわん。たいさんふくん。下界の地にハ
 伊勢天照大神をはしめてたてまつり。伊豆箱根
 富士せんけんゆや三所きふうせん。王城の鎮
 守いなりきおんかもさふね。八幡三所。松尾平野
 そうして。日本国の。大小の神祇ミやうたうしや

〔36ウ〕

〔37オ〕

一「そうけいのほうこつとなつてことをる」

〔40オ〕

〔金剛又兵衛申候

一「あしいたけなる合力にてよ」 一「花のさく草もなし」

一「見る人もなき」 一「た、すへからく」を大つ、ミ一つ打。

一「大はかせ、めはかせといふ事有。

〔御中殿 一ゆやハ、春の明ほのとたとへ。

一松風ハ、秋のゆふへとたとへ。此中口伝有。

一男まひハ、はんしやくのことし。あたかなともおなし事也。

一「の、宮・定家などハほけてうつへし。此中口伝ある也。

万端こゝろもちにあり。能々きうめを

一ものきの段と云事、物きに斗云事、両子細有也。

一「高砂などハ、めよりうへのはやし。たとへハかれ木二花のさ

きたることくうつ也と、人の被申候。〔40ウ〕

一「松風物きの段と云事、人のしらぬ也。つなかぬひや

うし也。そうしてひやうしハなし。きさミ二つつ、うち、外

ハうたす。段と云ハ、すいかんをかたへかくるとき、かしら一つ

一段也。ゑいやとハうたす、きさミよりそのま、うつ也。ゑほ

しをあたまへあつる時、かしら一つまへのことし。さて

「ミつせ川」とうたひいてすして「せいこのくらひ也。

一三十のひやうしと云事有。是ハ、大略夕かほ・井筒

にある也。

一「うたかた人ハいききえてかへらぬ水のあわたのミ、ちりは

てしよりも」きさミをつけてうつ也。「水のあわた」、云所

ハ、ヤこゑを一つかけてひかへ。

〔41オ〕

一「夕かほ、はしめ「山のはの心もしらて」と云「せい、かしらかなら
すうたす。うかりとうちて、あひしろふへき也。是ならひ也。

是よりきさミをのせて是一段也。

一「うはそくかおこなふ道をしるへにて」と云、さてかしらうつ也。

此かしら一段也。序にかゝるとき、まへのひやうしをうしなふ也。

一「井筒も夕かほのことし。

一次第者、心ハ大臣にうたひをよくうたハせんため也。

一「せいハ、大夫をかくやよりいたし、是もうたひをよくせん為也。

一くりさしこゑハ曲舞をよくせんと云心也。只分別肝要也。

一「しやうく」のミたれ、大事有。一「かつこ、大事有也。

一「やうきひ之まひ、序のをろしそゝりてハかゝらす。

ミつほとうちきり候て、いかにもうつくしくはやすへし。

やうきひのはやしハ、のせてたんふりくとうつ也。

一序のかしら、かけこゑ、やあとかくる也。

一「忠則之はやしハ、たとへは、はしをさひくミかきを

あてすし、するりく」とハかくにけつりたることく

うつへし。み、にた、ぬ様ニ、いづれも修羅ハ同意也。

一「せいくわん寺に心之ひやうしと云事、「しやうしゆらい

かうす」と云所也。

一「定家には、「よろく」とあしよは車の」と云所也。心

のひやうし善悪、爰にて小鼓手うつ也。手之後二善悪、

大鼓かしらをうつ。こゑかけすにうつ也。「をいて」。

一「百万にハ、「しんしんをいたすもわか子ニあわんため也」

と、二つかしらをうちてより少もうたす。是鼓も大

〔42オ〕

〔41ウ〕

夫もかつしやうする心もち也。

一「遊屋ハ、ねんしゆかしらうちてより後、是もうたす。
 〱百万、同意也。

一「江口ハくつかふりと云て、次第を一度うつ也。一せいハ、いかにもしつかに。さてこし、しつめかしらをうちてより後、次第たるへし。能にても三人舟へのり候て、次第たるへし。此曲舞者、もちこすひやうしと云也。常のひやうしよりも少したるく、くわいをかならずうち、そこより

〔42ウ〕

ひやうしをかへ、いつものたるへし。「月もかけさす」と云所もうつ也。うちやうをしらすハ無用と云也。物き一段同意也。つなかぬひやうしとうつ也。

一「諸事きいきりうたひにあふしてうつ也。こまかに

とあふくとうつ所あり。たとへハ「花にもミちよ

月雪のふることもあらよしなや」と云所ハ、あふくとう

うつ。「おもへはかりのやと」云所ハ、又こまかにしんにうつ也。

一「こゝろとむな」と云所ハ、又あふくとうつ也。いづれも其分別。

一「うき舟、一せい之うちやうの事、是ハこまかにとうつ也。〔43オ〕

一「かたをむすんですそにさけ」

一「かさしそを、き花ころも、きせんくんしゆする

此寺の

〱かきつハた

一「つましあるやとおもひそ出るミヤ二人」うちき

りのかしらうち候て、「やこ」とこゑをかけ、うたす

るハ観世類也。二ノこゑなしにハ金春也。

一「遊や、「ふるハ涙か桜花」と云所、しつかにひやうしをよくのせて心をつへし。其故ハ、おくに大事のたんしやくのたんをか、へ候也。〔43ウ〕

一「籠大鼓、はしめのかけりハ、かしらうたす。後之かけりハ、かしらうつ也。はしめの物すくなにしつかに、後のかけりハはしくとうつ也。

一「源氏供養曲舞之うたひ出し、かしらをつつ也。

一「如観世三うちすて、大略うつへし。ヤあこヤはこ。ヤこ、とかけこゑかくる也。一「うとう、やはしかをとうたハする也。

〱田村

一「すなハちけんちやくおほい、すなハちけんちやく

おほいの、かたきハほろひにけり、これくわんおんのふつきなり」〔44オ〕

一「道成寺乱ひやうしの事、

「道成寺とハ申也。や山寺のや」、さて爰にてはの舞有也。一「三井寺、しゆしやうにとうつ也。

一「百万ハ、よろつミちゆきの心也。

一「関寺小町ノまひ、老女ノまひにて、よハくとうつ也。

よくのりて、ふきか、りにも、序にも、ふく也。時により候。

一「す、りをならしつ、ふてをそめてもしほくさ」

〱とうかんこし

一「あふなむさんほう」一「けにたひこもかつこもふへち

りきけんくわとにも」

〔44ウ〕

三井寺

真盛

十より政

とうほく

ゝあたか

くらまでんく

ぬへ

ありとをし

桜川

花かたミ

ゝ百万

道成寺

あふひの上

きふね

長良

しゆんえひ

ゝ遊屋

一「牛かい車僧よせよとて、く、是もおもひの家のうち、はや御出とす、むれと、こゝろはさきにゆきかぬる、あしよハ車のちからなき花見なりけり 名もきよき水のまにくどめく 八山ハおとハの」

一「又花の春ハきよ水の たゝたのめたのもしきはるも ちゝの花さかり 山の名の」

一「せいすひちのかねの声」 一「ほとけの御まへにねんしゆして」 一「ふるハ涙か桜花」と云所、よくのせてしつかにうつへし。〔48オ〕 其故ハおくニ大事のたんしやくの段有。

一「東ちとても東山」

一「ゆやのさしこゑのうち、かしらうたす。

江口

一「又うちのほしひめの、とハむともせぬひとをまつも身のうへと」 一「まつくれもなく、わかれちもあらしふく、はなよもみちよ月」

一「東山」

一「光とともにしるたへの、はくうんにうちのりて、にしかへるまきのそらにゆきたまふ、ありかたくそおほえたる、ありかたくこそおほゆれ」

一「行すへハうとの、あしの」〔48ウ〕

一「捨人の世かたりにこゝろなと、めたまひそ」

一「世をわたるひとふしをうたひていさやあそはん」

一「さらに世々のおハりをわきまふることなし」

一「さきのよのむくひまでもおひやるこそかなしけれ」

一「もうせんのエんとなるものをけにや見る人ハ

六人のきやうにまよひろつこんのつみをつくる

ことも見るかこときくかことにまよふかことなるへし」

一「おもへはかりのやとにこゝろとむなとひとをたにいさめしわれなりすなハちふけんほさつとあらハれ

ふねハひやくさうとなりつ、ひかりと、もにしるたへのはくうんにうちのりてにしのそらにゆ

きたまふありかたくそおほえたるありかたくこそおほゆれ」

一「ろくしんのきやうにまよひろつこんのつみを」

ゝ野々宮

一「くろきのどりのふたはしらにたちかくれてうせにけり」〔49ウ〕

一「宮す所ハわれなりとたくれの秋のかせもりのこのまの夕つくよかけかすかなりこのしたのくろきのとりのふたはしらにたちかくれてうせにけり」

一「たれ松むしのねハリんりんとしてかせほうくたるの、宮のよすからあハれなり」

一「こ、ハもとよしかたしけなくもかミかせやいせのうちとのとりいにいるすかたハしやうしのミちをかミハうけすやおもふらんとまたくるまにうちのりてくわたくのかとをやいてぬらん」

〔50オ〕

一「月にとかへすたもとかな」

一「けしきもかりなるこしはかき露うちはらひとハれし我もその人もた、ゆめのよとふり」

〱にし木、

かしら

一「実や聞ても忍ふ山そのかよひちを尋ん」

一「けふのほそ布の折くにしき、や一名たてなるらん」

一「もみちはそめてにしきつかハこれそといひすて、つかのうちにそいりにける」

一「かけはつかしやはつかしやあさまにやなりなむさめぬ」

〔50ウ〕

一出羽こさす。「いかにお僧」

かしら「ふしを能開合

すてに」

「さきこそ、ゆめひとなる物、さめなはにしき、もほそぬのもゆめもやふれて、しやうふうさつくたるあしたのはらの、のなかのつかとそなりにける」

一「はた折松虫きりきりす、つゝり」

一「をのかすむのちくさのいと細布をりて」

一「実やみちのくの」此クリ上マツクロニハヤスヘシ。

一「たて、はしらもいるましや、いたつらにくちはてんの」

〔51オ〕

一さうして人之まへにてつ、ミの雑談すへからすの事、いかにも初心ニ成候て、さてつ、ミ能うつへき事、肝要第一之心得也。

〱紅葉かり

一「むねうちさハく斗也」

一「あめうちそ、くよあらしの」

一〱当麻

〔51ウ〕

一「誠ハこのあまかのほりし山なるゆへに二しやうのたけとハ申なり、おひのさかをのほりのほるくもにのりてあかりけり、し雲にのりて」

一「す、しき道ハたのもしや」

・此ウチ上次第ヘカ、ル。イカニモユフ（トウチカ、ルナリ。此内ものすくなくに詠をよく聞てうつなり。

一「にこりにしまぬはすの糸」

・コノキキミラウツナリ。心ユダナクハヤクトマイヘカ、ル。

一「まことハこのあまか、のほりし山なるゆへに、二上のたけとハ申なり、おひのさかをのほりのほる、くもにのりてあかりけり、しうんにのりてあかりけり」

〱はせを

一「さもおろかなる女とて、さなきたにあたなるに」

〔52オ〕

一「花そめならぬに、そてのほころひもはつかしや」

一「やまおろしまつのかせ、ふきはらひふきはらひ、花もちくさもちりちりに、はなもちくさもちりちり

になれば、はせをハヤふれてうせにけり」

〱小督

一「われか身までも物おもひに、たちもふへくもあらぬこ、
る、今ハかへりてうれしさを、なに、つ、まんからころも
いさめるこまにゆらりとうちのり、かへるすかたもあと
はるくと、こかうハミをくりなかくにハ、ミヤこへとて
こそかへりけり」

一「ひきと、むへきことのはもなし」

一「此山さと、なかめけむ」、捨る所のうちやう、ほんのちを

打つめて、おつへおとす。ちやうくちよちよ、おつにて。

一「は、かりの心にも、とふこそなミたなりけり、けにやとハ
れてそ」

一「ことのはもなき、たちもふへくも
あらぬこ、ろ、いまハかえりてうれしさを、なににつ、
まんからころも、ゆたかにそてうちあわせ、御いとま

申かへる心も、いさめるこまにゆらりとうちのりかへる
すかたもあととるくと、こかうハ見をくりなかくに
ハ、ミヤこへとてこそかへりけれ」

〔53オ〕

〱あま

一「南無やしとしのくわんおんさつたの、ちからをあわせ

てたひたまへとて、大ひのりけんをひたひにあて」

一「おやこのちきりあさころもの、なミのそこにしつミ
けり、たつなミのそこにしつミけり」

〱三輪

一「杉たてるかとしるへにて、たつねたまへといひすて、
かきけすことくにうせにけり」

〱忠則

一「さてかうたかひよもあらし花ハねにかへるなり、わかあ
ととひてたひたまへ、木かけをたひのやと、せは、
はなこそあるしならまし」

〱老松

一「守へしくや、神ハ爰もおなしなの、あまみつそらも
くれなゐの、はなもまつもろともに、かみさひて
うせにけり」

〱百万

一「かんだんしてそのりけ、おやこあふの袖なれや」
一「かさしそおほき花ころも、きせんくんしゆするこのてら」
一「ほとけも御は、を、かなしミたまふ」
一「ねかひもミつの車ちを、ミヤこへとてそかへりける」

〱とをる

一「さすやかつらの枝々にひかりをはなとちらすよそは
ひ、こ、にもないたつ白川のなミの
おもしろや」
一「松風もたつなりやきりのまかき
のしまかくれ」
一「たどへは月のある夜ハほしのうすか
ことく也」
一「月もはやかけかたむきてあけかた
の雲となり雨となる」

〔53ウ〕

松風

一「月八ひとつかけハふつミつしほの」

三井寺

一「月も数ぞひて、ひやくはちほんのふのねふりのおとろ

一「山寺の松のゆふへを」一「くれに数あるくつのをと」同事也。

一ぬへのあけはのまへも同前也。

山うは

谷ふかうして鳥をとろかすと云心持

一さし声のうち、一圓かしらうたす。

一「月に声すむミやまかな」

あしかり笠の段

一「ミたる、かたをなミあなたへさらりこなたへさらりさらり

さらさらさつと

一のる一せひと云事あり。一番にかきる。

一うちすゆる一せひ、うちすへぬ一せいと云事あり。

一高砂なとハうちすゆる也。

一松風なとハうちすへぬ也。是も一せひはかりの時ハうち

すゆる也。其分別肝要也。

あたか勸進帳

一それつらつらおもんみれば、大おんけうしゆの秋の月

はねはんのくもにかくれ、しようししようやのなかき夢お

とろかすへき人もなし。爰に中比御門おハします御なをは

しようむくわうていとなつけたてまつりさいあひのふにん

54ウ

にわかれ、れんほやミかたくていきうまなこにあて、なんだ

たまをつらぬる。おもひをせんとにひるかへして、るしやな

ふつとこんりうす。かほとのれいしようのたえなん事

をかなしみて、しゆうしやうはうてうけん、しよこくにくわん

しんす。一しはんせんのほうさいのともからハ、此世にてハむひ

のらくにほこり、とうらいにてハしゆせんれんけのうへにさ

せん、きめうけつしゆ、うやまつて申とてんもひ、けと

よミあけたり。せきの人々きもをけし、おそれをなし

てとをしけり、く。

一鼓に貳つの病有。手のうちたき事、したるき事。

一鼓うつ時うたひを心二持へし。一つ、ミうつ時つめひらきを心二持へし。

一かしらうつ事、うたひの字の中をうつ也。

一やこゑかしらの跡にもさきにも、あまらぬやう二こゑをかくる也。

一うたひのとめにうつかしら、後のかしら、うちきるかしら也。何も此分也。

一うつきさミと申事有。一もんある能と云事有。又

もんなき能をははやし、知る心にかくる也。

一かしらをつくる事、はやくなりたかる物也。心をひかへうつへし。

一つくり物出てより後こしをうつ也。まへにかしらうたす候。

一しての出る時、しはひの人のかほに有。鼓打かくやをミぬ物也。

一しての舞、あふきあしもとをゆたんなく心をつくる也。舞の

はやき時ハつ、ミもはやし。おそき時ハ鼓もおそし。能々心

をつくる也。一小鼓のしよしんなるをは小鼓をきかす

心に油断なくうつ也。手のうちゆたんあるましく候。

一せいをうつ時うたひ出しを心にうとふて一せいをうちそむ

56ウ

る也。一座敷にてハ一せいをうたひて人申合也。つ

きなき事をうたふ事有也。

一高砂・瀧之鼓・みもすそ川、是等之ワキ能ニハ手をうたぬ物也。

惣別ワキ祝言ハ後ばりに打物也。うたひも其心得有へし。

一関寺小町、老女ノ心持肝要也。たとへは家のはしらをたつ

るニ一本くさり木、一本ハくさらぬ木をたてませ候やうに心

持を打也。かしらなどひかへ、かしましくなく老女の心持肝要也。

一百万・三井寺、此等之類ハ当座の物狂也。

一松風などハしぢうの物狂也。一やうきひ・野々宮・定家、是

等之類ハ王ノ御息女、其心得有也。一うねめハ内裏の御神楽〔57才〕

の火をかきたつる役也。

一観世類ニハ次第も一声も万大鼓からうち出し候也。

一今春にハ万小鼓より打出す也。然者中比弥左殿あひ

手にたかやす成候時、ミやうかのためにて候と申て、弥左殿より

御打出し候事也。是ハこしつ也。観世

ハ一ひやうし也。

一ちちちちちとついととちちちちととと、ちとキキツヤアイヤカ

なかしうち候てこいやい、さてこしを打也。其時小鼓ハ八つかしらうつ也。

小鼓より打候手は、いつものこし也。

一カキ キキキ カキ キキキ カカ キキキ カカキキ ヤア、イカカ 〔57ウ〕

一江口・うき舟などニなかし有。一百万、「申ハおそれなれども、所ふつ」〔57ウ〕

一玉かつらハうき舟のあねこ也。けつかう也。うき舟ハ玉かつらのいもうと御

兄弟なれ共、うき舟ハさたうなる人にて御座候ニより、はやしも玉

かつらうき舟、其心得有へしと也。一小督、小鼓弥左衛門尉殿

一「駒をかけよせかけよせてひかへくかくハなにそとき、たれは

おつとをおもひて」

一道成寺の舞ハおろしふかす。是習也。

一「花の外にハまつはかり暮そめてかねやひ、くらん」〔1〕の字を引まハし候事、

一惣別うたひの内、打やう。二つきさミ斗ハつまり候。さき〔1〕の字を引まハし候事、

にて一つやりこし候て、一つ又あひに二つきさミ入、あわせて打へ

し。心持肝要也。

一いぬノ年七月五日ニ京にて御普請ノ時、田丸中務様

御宿へ備中屋一噌御朝めしニ被参候てひやうしやうかへ

し之事を御相伝候。其御座敷ニ中書様・太田・

幸五郎二郎斗にて候。

一本之序とハひやうじやうかへしの事也。ひやうじやうかへ

しとハ本の序之異名也。ひやうじやうかへしのか、り

ハ角ノ拍子と申にてか、り候。一噌口笛にて則我と手鼓

にてか、りをあそはし候。

一ひうらりほう 笛のほうと小鼓之後ノヲツ同前也。

是を角ノ拍子と云也。又ひやうしやうかへしをき、つけ

様ハ序之内ねとりをふき候。是聞付やう也。此通ひ

すへしくと一噌返々被申候。他見候ましく候。

一江口大鼓之事

一「すいちやうこうけいにまくらキをなら太夫へしいもせ小もいつ小」

一公方様御成之時之事、又公方様にての事、御能過候て

御酒もり御座候。其時、一番候。観世大夫、放生川ノ「たんかはうこく」とうたひ出し候。調子ハそうじやう。又笛吹ニ調子をかへ候へと大夫申候時、黄しきを吹也。又頓而そうじやう二なをし候。扱御順舞あり。とうさいしやう殿御舞

ハちこのやふさめ、あすかい殿御舞ハ字治より正の小うたひ也「なにもにす月こそ出れ」〔59ウ〕

細川殿御舞ハ春榮なり。「かしんれいけつ」。いつれもくく代々相定候。扱御酒もり、やうく御はたしの

時、おさめ二大夫し、のうたひをうたふ。是にておさまり候。〔59ウ〕

●式三番之次第

座付吹候て、やかてひしく。又其後、高音のゆり一くたり。へとふくくたらしくくら、たらしら、りくくとふ。地へちりやたらしくくら、た、りらかり

ら、りとふ。大夫へところ千世までおわしませ地へ我らも千秋さふらわう。夫へ鶴と亀とのよハ

ひにてへさいはひ心にまかせたりとうくくたらしくくらへちりやたらしくく

ら、たらしらかりら、りとうスマイへなるは瀧の水、く、日はてるとも

へたえすとふたり、ありうとうくくとふすまひスマイへたえすとふたり、つねにとふたり高音ノユリニツ加添す

君の千年をへん事は、天津乙女の羽衣よ、万

〔60ウ〕

歳ましませへ龜あそふなり、ありうとふくくとう

○同高音のユリ
一ツ、アトハヒシク。へあけまきやとんとや

へひろはりやとんとやへ座して居たれ

ともへカノユリヨリ、まいらふれんげや、とんとや

千早振、神の尊の昔より、わか此所ひさしかれと

そいはひへそよやりちや、とんとや

へ凡千年の鶴は、万歳楽共うたふたり、又万代

の龜ハ、こふに三きよくをそなへ、渚のいさこさくく

として、朝の日の色をまし、瀧の水れいくと落ちて、

夜の月あさやかにうかんたり、天下泰平国

土安穩の今日の御祈禱也○ありはらや、なん

しよの翁とも、へいもの祝言の笛くさり由へあれハなしよの

翁とも、そやいつくのおきなともへ六ノ下

へそよや舞の吹様くたり有翁舞の吹上也口伝あり。

へけふかる事かな、けふかり面白し、喜びの舞なれば、一舞

まわふ、万歳楽くく手あり口伝

へおさひくくおう、喜びありや、わか此所よりもな

うかい、やらしとそおもふへヒシキヨリ、マイニカ、也。

へ物に意得たる、あとの大夫殿にそと見参申さう

へちやうとまいりたへたかおたちへとし比のはうはひ

つれともたち、御ミや殿ためにまかりたつて候、さん

はさるかく、きりくしんしやうにまふて、座敷に

〔61ウ〕

〔61ウ〕

さつと御なをり候へ。此色のくろき尉かまわうするハやすふ候へ共、先あとの大夫殿、御舞候へ

「あらかやうかましやくひやうしやうかし」まじ吹て、ひしきてもまひにがる。又ハやひし候ても不音也。

〔62オ〕

笛の心持

一はやきをしつめ、おそきを引たて、きさはしを三人つれてあかるに、小鼓さきに、笛中に、大鼓あとにたつを、さきなるを引とめ、跡なるを引上、三人ならひてあかるやうに心持有へし。此心持也。跡は序、中は破、さきは急。

一西行桜「後夜の鐘

の音、ひ、きそそふ」よりかけりあり。「春の夜の」と

云てやかて舞に吹へし。外山かたには、かけりなし。序

〔62ウ〕

あり。同じく序吹様有。はのおそき程也。心持

よく候。一舞のうちにそりかへりに、ひやり

やりと云手を吹へし。五段のうちにハた、一度なら

てハ不可吹。座敷にても、はて候はん時、吹手也。それによ

つて座敷のはやしハ笛のま、たるへし。秘事也。

一舞二度ある時ハ、後の舞の吹とめ、ひしき候。はし

めをかに、後を呂に、後をかに、始を呂に吹也。是ハ

舞の吹出しの事也。

〔63オ〕

一祝言ハ平調に可吹。取分、此調子くんちんに用なり。

一かひこの笛、三人大臣出候時、一人正面にむき礼

をいたし候て立あかる少前かとに吹いたす。油断

すへからす。

一切の能のうち、文よむ事候て、其うち吹へからす。

一はや笛の事、しやうそくによりて、吹様かハる

へし。黒し白し黄色ハ、これしつかに吹へし。赤

きハ心持はやし。道成寺などハしつか也。

しも前也

〔63ウ〕

一雨などのふり候はん時ハ、いかにも心をはつたと持て吹へし。

其心ハ、見物衆の心を能に入さすへき心也。はて候はん時

の能も、心もち如此也。

一造り物の中より出候時は、いつれもくひしくへからす。

一能のはて、狂言のはてをひしくへし。此能一はんに

てはて候はんなど申候共、きりのとめにひしくへから

す。ひしく時は、いつれも吹くたして、ひしく也。又こい能

などは帰り、やかてひしくへし。

〔64オ〕

一舞台中にて物を着は、しんにふく。鼓うちの脇

にてき候へハ、さうにふく。よのねとりをふくへからす。

一聳入よめいりなどに返す手をふくへからす。

一せいこのしのうち不可吹。出はの大鼓のこののうち

をも不可吹。同じくかしら三つ打候て吹いたす。

一ゆりの心持。いかにも細き糸をはりて、中よりきつ

てはなすことくに、ゆりとめをゆる也。

一とうゑいのかつこハ、やかてかゝる。東岸居士・自然居士ナトハ

〔64ウ〕

一段舞を吹候てカ、ル也。

一しんの序吹候て、やかて手有。白楽天・老松・放生河、

これ三番に極りたり。

一しんのらいしやうハ、始も後もひしく也。

一かんたんの吹出、口伝あり。同じく三段迄吹やうかハる。

一本のねとり、一ツならてはなし。人前にて聊尔に吹へからず。心持笛をなへぬやうにふくへし。又吹納末の音おそきハ、うれへなり。末はりに吹。祝言也。

〔65オ〕

一舞の笛之吹様、舞におりて一段、かん也。拍子

の心、いかにもさくに二段めより二段めにあり。のりてしつかにふく。同手アリ。以上三ツアリ。三段

め少拍子ヲつめ、四段めよりつまる。かんの手一ツ有。五段はかん計也。急なり。

一はや笛を二くわんにて吹事有へし。独は呂より、又独ハかんより吹。たかひにちかへて可吹也。

〔65ウ〕

一神楽ハへいをすて、扇をひらき候へは舞にかゝる。神楽三段、舞二段也。同舞に定たる手あり。

一狸々の前ハ渡拍子。後の吹出し、呂。ミたれハ仕手に向へし。同じくかゝりやう二つ有。

一神舞は後ニかんより吹出す。

一早笛ををさへ所あり。神楽にも同前也。

一調子をとふとも聊尔に云へからず。

一音に三つつ、替り候音いて候間聊尔にこたへぬ事なり。一笛を吹にハのむ息肝要也。〔66オ〕

一はや笛の後のかけり、いつれも舞に吹へし。

一かくの笛、いつれも四段をくり返し／＼ふくへし。

一わたり拍子、何も三段に吹へし。おなしくとめに

大事可有。口伝。一鼓桶にかゝりたるを

見、すわうのひもをとき候を見て吹出す。ひしき

候時ハつ、ミを構^{かた}たるを見て吹へし。

一貴翫の人に笛をいたす事。かしらをさきへ、うた口を上になして左の手をさきへ、右の手をあとなしてわたすなり。

〔66ウ〕

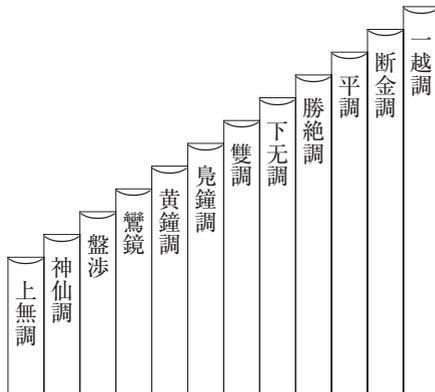
一つうれいの人にうた口を右へなして、右の手をついて左にて渡すへし。

一「身のほとをしれ」。これもろ／＼へわたすへし。取分此七ツのユリ、何へもわたるといへとも、中にも

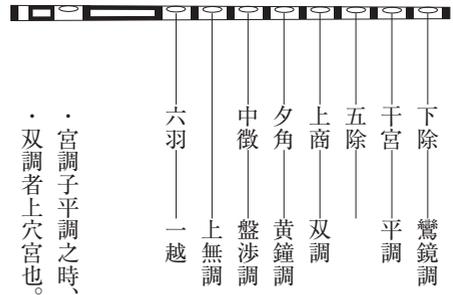
「あらさひし」といふ所にふくゆり也。此たくひおなし。よく

〽一十二律甲乙者以八逆六名日可分別

〔67オ〕



此寸方者、依管大小相替也。



・宮調子平調之時、以干穴當宮位也。
 ・双調者上穴宮也。已下以上可分別。

時ノ調子

- フ卯 サウテウ
- 亥子 ハンシキ
- 一越 子 十一月
- 断金 丑 十二月
- 平調 子 正月
- 勝絶 卯 二月
- 下無 辰 三月
- 雙調 巳 四月
- 巳午 ワウシキ
- 申酉 ヘン
- 辰戌 ロツ

〔67ウ〕

鳧鐘	午	五月
黄鐘	未	六月
鸞鏡	申	七月
盤涉	酉	八月
神仙	戌	九月
上無	亥	十月

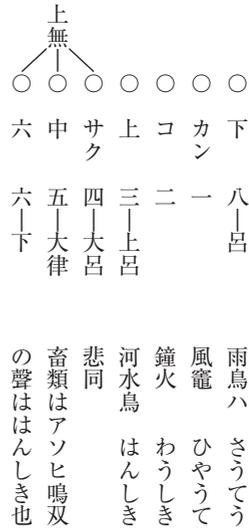
〔68オ〕



〔69オ〕

〔69ウ〕

●● 笛之穴之名



〔69ウ〕

にあひぬれはのかすして笛をふけは調子あふ時ひ、くなり。聞人の躰身にもしむ

ハかりにおもしろく候ハん事尤候。た、調子肝要也。一はの舞の吹いたしのなまり、くるしからず。

〔71オ〕

一次第ハかんのねとり。ユリナシ。

一―せいハねとりにユリアリ。

八かしらのたち吹す。鼓をふきけすにてわろし。

〔71ウ〕

・三ハ ・定家 ・まつかせ ・せきてら

・たかさこ

一高砂 二た、のり 三定家 四遊屋

五三ハ 六たへま 七まつかせ 八せきてら

九やまうは 十江くち 十一三井寺 十二通小町

十三あたか 十四井筒 十五錦木々 十六やうきひ

十七とうほく 十八うねめ 十九夕かほ上 廿うき舟

廿一玉かつら 此書立之内五番書ツケ申候。

〔72オ〕

〱三ハ

〱次第うたひとめ、かしらなし。

〱「ろうせいとしつかなるさんきよ、しはのあみと

ををしひらき、かくしもたつねきりしき、ミ、

つミをたすけてたひ給へ、あきさむき、まどの

うち、く、のきのまつかせふきしくれ、

「したひのミつをとも、こけにきこえてしつかな

る、此山すみそさひしき」^ハとむらいきませ枕た

てるか^カとをしるへにて、たつね給へといひすて、

〔72ウ〕

○ 九 七

わたましの時、座敷にて火の調子吹へからず。

定まりて吹てうしあり。

一ねとりの事、末をよハくふけハ愁也。又あまり

にいきをはるもわろし。少末はりに吹へし。

つ、けて吹くたす。愁也。吹くたしてまつて、みし

かくふく祝言也。必度々かやうに吹へきにハあら

す。祝言の時など、うたひはしむる時の心得也。あ

はれなるうたひのうち、又はねとりなとしませ

て吹にしつかに長く吹へし。

一笛の吹出しと吹納とハ、しの字のことし。是を

あしく心得ては笛よハくなる也。しの字の心、

口伝アリ。

一鶯の笛によるといふ事も、調子鳥の音

〔70ウ〕

かきけすことくにうせにけり」おつ二つ、いつもの物

「此さうあんキよりのたち出て、ゆけか一つにて打かへしハほとなく「行は」と三ハ

のさと、ちかきあたりかやまかけの、まつハか一つ打かへししる「松ハ」

しもなかりけり、枕むらはかりたつなる、かみか

きハいつくなるらん、かみかきはいつくなるらん、

「しはしまよひの人こゝろや、おんなすかたと三

わのかみ、かしら一つ打かへし、ちわやかへおひひきかへて、た、ほ

おりこかやくすなる、ゑほしかりきぬ」「かたし

けなの御事や」にかしらなし。序、「さいとはう

へんのことわざキこすかしなくもつてよのためな

り、中りやくのかしらにて打とむる。さしこゑ、

「やちよをこめたまつはき、かハキキカらぬ色をた

のミけるに」、か二つ、一つにて打かへし。くせまひ、「夜る

ならてかよひたまハぬハ、いとふしんおキキ、きこと

なり」、か一つにて打かへし、「た、おなしけハとこし

なへに、ちきりもこよひはかりなりと、懇キこすか

「このやまもとのかみかきや」おつ

かたれば、すきキ例どきともの下へにとまりたりか、こハそも

あさましや、ちきりし人のすかたか、そのいと

の三わけのこりしより、三わけのしるしのすき

しよをかたるにつけてはつかしや」か一つにて打

かへし、「けにありかたき物かたり、きくにつけ

ものりの人」「これそかくらのはしめなる」、大

鼓うち出すにかしらつけす、「あまのいわとを

ひきたて、かミハあとなくいり給へハとこや

ミのよとはやなりぬ」是より後いつもの物に候、

「まひたまへハ」にうたひふしあり、太鼓かしらあり、

いつものにあらず、「てんしやう太神」の「てん」のちより

キよりつけ候、「おもへハ伊勢と三わけのミ、くハか一

たひふんしんの御事、いまさら何といわくらや、

そのせきのとのよもあけ、かくありかたきゆキ

めキのつけ、さむるやなかこりなるらん、さむるや

なキこりなるらん」か打とむる

「山よりいつる」ゆくゑやさためなキかるらん、こゑあり、

「冬たつやたひのころものあざおつ二つ

またき、くももゆきかふおちこちのやままたや

まをこへすきて」、か一つにて打かへし。「もみちにのこる

なかめまで、花のミやこに付にけり、はなかのミや

こにつきにけり」、おつ二つ。「いまふるも、やとハむかし

乃しくれにて」、かしら一つにて打かへし。「宿ハむかしの

しくれにて、心すみにし其人の、あハれをしるも

夢のよの、けにさためなやさたいへの、のきはの

夕しくれ、ふるきにかへるなミたかな」とうたひ候て、

「ものすこき夕なりけりく」にてかしら打かへ

し、おつよりとり候て、いかにもたふく」と打

かへし打つ。「御きやうをもよみとむらいたまハ、

「たもとかな」「よしそれとてもおんなくなるま、よせてハ
かへるかたをなミ」、か一つにて打かへし、「よせてハ帰るかたを〔78オ〕
なミ」、か一つ、「あしへのたつこそハたちざわんげよもの
あらしもをとそへて、よさむなれとすこさん」〔78イ〕「さのミ
なとあま人のうきあきの身をすこすらん」、か一つ
にて打かへし、「奈嶋やおしまぬあまの月をたに

かけをくむこそ心あれく」、か一つにて打かへし、

「はこふあとをきみちのくの」〔78ウ〕「月ハひとつかけ

ハふたつ、ミつしほの夜のくるまに月をの
せてうしともおもわぬしほちなや」、「又いつの
世のおとつれを袞かせも村雨もそでのミぬれて」

「我があととひてたひ給へ」、か一つにて打かへし、「露も
おもひもみたれつ」、か一つにて打かへし、「こゝろ

きやうきになれころもの」〔79ア〕「わする、ひまもあり

なんと、よみしもことハリや、なをおもひこそハふかけ

れ、よひくぬきてわかぬるかりころも、わ
すれかたミもよしなしと〔79イ〕かすて、もおかれすと

れハおもかけにたちまさり、おきふしわかてま

くらより、あとよりこひのせめくれは、せんかたなミ
たにふししつむことそかなしき、ミつせ川」、いわする所

心もちあり。「ミつせ河」よりまひまでへちきなし。

「いなはの山」よりのちのまひまでもへちきなし。

「松にふきくる」「わかあととひてたひ給へ、いと

〔79オ〕

〔78ウ〕

ま申て、かへるなミのをとのすまのうらかけて、ふ
くやうしろのやまおろし、せきちのとりも〔79ア〕こゑ
こゑに、ゆめもあとなくよもあけて、むらさめとき、
しをけさ見れ〔79イ〕ハ袞かせ〔79ウ〕はかりやのこるらん〔79エ〕
打とむる。

次第あるか、り、うたひとむるところ、かしら二つにて

打とむる。「ことをつくしてしき嶋の三道をねかいの

いとへて」、か一つにて打かへし、「おるやにしきのはこ

す、き、はなをもそへてあきくさの、露のた

まことかきならず、袞かせまでも折からの、たむ

けにかなふ夕かな、たむけにかなふゆふかな」

「すけるこゝろハあふみの海〔79マ〕のさ、なミや、はまの
まさこ」のこうたひ、おさめにかしらなし。「うつろ

ふ物かよのなかの」、か一つにて打かへし、「人のこゝろの花〔80オ〕

やミゆる、はつかしやわひぬれは」〔80イ〕「さそふ水あらハ

いまもいなんとそおもふ、はつかしや〔80ウ〕けにや

つ、めとも、此かしら、ていかなどの同前。さしこゑ

あるか、り、かしらなし。ゑいにおなし。かしら二つ、

一つにて「有ハなくなきはかつそふ世の中に」、

あるか、り。「一夜とまりし宿までも、たいま

いをかさり、かきにきんくわをかけ、戸にハすい

しやうを」〔80エ〕「はにふの、こやたまをしきしゆか

ならん」〔80オ〕「草の戸にす、りをならしつ、筆

〔79ウ〕

〔79ウ〕

〔80ウ〕

をそめてもしを草、かくやことのはもかれくゝにあはれなるやうにてつよからず、つよからぬハおほなのうたなれば、いと、しくおいのみの、よハハリゆくはてそかなしき、いたハしやめもあてられぬありさまとても今夜ハ」

「ちこのまひ、うちあけ候て、きさき一段うち候て、「年待であふとハすれとたなはたの」も、とせは」
よりまひ。 一序之内おろす事あり。

「まへのまひをりやくして、のちのまひをはの舞にもはやし候。

一「さるほどにはつあき」とかへさすにうたふ事あり。是ハくわんせか、りなり。心得て打へし。

「はつかしのもの、はつかしのもの、こかくれもよもあらし、いとま申てかへるとて、つへにすかりてよろよると、もとのはら屋に帰りけり、も、とせのうはときこえしハ、こまちはてのななりけり、こまちはてのな、りけり」にて打とむる。

「今をハしめの旅衣、日もゆくすゑそひさしき」、次第取て、「今をハしめの旅衣、日も行くすゑそひさしき」、かしら二つ一つおつにて打かへし、なのらする。「旅衣すゑはるゝのミヤこちを、けふおもひたつうらのなみ、ふなちのとけき春風の、

〔81ウ〕

〔81ウ〕

いくかきぬらんあとすゑの、いさしらくものはるゝと、さしもおもひしはりまかた、たかさこのうらにつきにけり、たかさこのうらにつきにけり、おつ二つさて一せいで候。へいせいのやうにて候。しつめかしら、か一つ、又三つ、きか一つ、一せいうちこみ候て、又か二つ、「81ウ」にて打かへし、さしこと「おもひをのむるはかりなり」、中りやくのかしらうち候て、「おとつれはまつ」とうたハする。此うたひとむるところ、か一つにて打かへし、「所ハたかさこの」、又か三つにて打かへし候て、又うたハする。又「なるまていのちなからへて」にてか一つにて打かへし、「なをいつまでかいきのまつ、それ久しきめい所かな、それも久敷めい所かな」、おつ二つ、「春も長閑に」、又「しかいなミしつかにて」、かしら一つにて打かへし、「しかなミ」うたハする。又「あいにあひおいの忝こそめてたかりけれ」、かしら一つにて打かへし候て、「けにやあおきて」も、こともおろかやかゝるよに、すめるたみとてゆたかなる、きみのめくミハありかたや、きみのめくミハありかたや」さてくり上、かしら四つ五つうちでうたい出さする。「やうしゆんのとくをそなへて」、か一。「なんしはなはしめてひらく」、やはか一つにて、やはかしら二つかさねて又一つ、合三つ、いつものにて候。さてさしこゑうたい候て、か二つ、

一つにて打かへし候て、「しかるにちやうなふか」「春のはやしハツキの」、又くせまひの「あきのむしハツキのほくろハツキになくもみなわかキカのすかたカならすや」、か一つにて打かへし候て、「中にも此まつハ」とうたハする。又

〔83オ〕

「いこくにもほんちやうにも、はんミンこれをしやうくわんす」、か一つにて打かへし候て、「たかさこの」とあけはうたハする。又「まことなりまつオツのはの、ちりうせすキキしているハなを、まさきのかつら

なかきよに、たとへなりけりときハきの、中にもなハたかさこの、まつカたいのためしにも、あひをひのかけ

そひキキさしき」、か二つ、一つにて打かへし、「けになにおほまつかへの」、かしら一つにて打かへし候て、「おいきのむかしあらハして、そのなをなカのり給へや、今ハ何をかつ、むへき」、かしら一つにて打かへし候て、「これハたかさこすみのゑの、かミこ、にあひおいの、ふうく」と

〔83ウ〕

「住吉に先ゆきて、あれにてまち申さんと、ゆふな

ミのみきオツわなる、あまの小ふねオに、うちカのりて、をひかせにキキまかせつ、沖のかたオにいてにけりや、をきのかたオにいてにけり」、かしら二つにて打とむる。「高砂や、この浦ふねにほをあけて」、かしら一つにて打かへし、「月もろともに出しほの、なみのあわ路のしまかけや、とをくなるおのをき過て、はやすみの江につ

〔84オ〕

か、りにて候。「たまもかるなるきしかけの、松根によつてこしマヤをそれは、せんねんキキのみとりに手カに

ミてり」「ハ打上つねのこどく打とめて、つ、けて中略にて打かへすへし。

「ありかたのようかふや、月すみよしのかミあそ

ひ、ミかけををかむあらたさよ、けにさまくカのまひひめカの、こゑもすむカなりすみの江の、まつかせ

もうつるなる、せいはいはとハこれやらん、かミとのミちすくに、ミやこの春にゆくへくハ、それそ

けんしやうらくのまひ、さてはんせいのおミ、ころも、さあすオツかいキキなカハあくまキキをはキキら、おさむ

る手にハしゆふくをいたき、せんしカうらくハたみキキをな

て、まんさいオツらくキキにハいのちカをキのふ、あひカをキひのまつかせカさつカさつカのこゑカそたカのしむカ、さつ

一つにてとむる。

〔85オ〕

〔85ウ〕

一ハわきの能次第之事、きより打出す。口伝

あり。さて本のかしら可打申候。

さて上りやくのかしら打へきなり。

さて下りやくのかしら可打なり。

一大事のかしらなり。一二このかしら一大

事にて候間、少々にてハ打ましき事也。

〔85オ〕

